



特選
2016
金融広報中央
委員会会長賞

第14回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

深刻化するシングルマザーの貧困

三重県・三重県立宇治山田商業高等学校 3年 西村 夏紀

現代、シングルマザーは年々増加傾向にある。その中の80パーセントは養育費をもらっていない。さらに、日本の母子家庭はワーキングプアであり、シングルマザーのうち、正規雇用は約4割と半数以下である。残りの約6割は生活が苦しい場合が多い。これが金銭の貧困である。

シングルマザーに限らず、ひとり親家庭は四つの貧困が降りかかる。先ほど述べた金銭の貧困をはじめ、働かなければ生きていけないため、仕事に忙しく、子どもと一緒にいる時間が少なくなってしまう時間の貧困や、働きづめになり肉体的・精神的疲労からくる健康状態の貧困、周囲と繋がりにくい関係の貧困があるという。四つも貧困はあるが、ほとんどが金銭の貧困からくるものである。そんな金銭の貧困をどうにかできないものだろうか。

私の家も母子家庭であった。今思えば、この四つの貧困に当てはまっていたと思う。母は未婚で私を産み、女手一つで育ててくれた。私を保育園に預けることができるようになったのは2歳のときだった。そのときからすでに生活が苦しかったらしく、夜の仕事をしていたことを覚えている。小学1年生の頃から朝は自分で起きて学校に行っていた。その時間にはもう母はいなかったのだ。小学3年生の頃に母は転職したが、その仕事は男性がやっても大変な肉体労働だった。始めて6年でついに母の体にぼろが出た。手根管症候群になったのだ。やむを得ず転職するしかなかった。高校1年生の秋、母は喫茶店のアルバイトを始めた。それだけでは生活が苦しく、喫茶店のアルバイトの後に寿司屋のアルバイトを掛け持ちしようとしたときだった。母の病がわかったのは、子宮頸がんだった。仕事に追われ、病院に検査を受けに行く時間も手遅れになってしまった。毎年3月と4月は支出の多い月である。そのため、特に困ったのは、通学するためのバスの定期を買うお金だ。母は入院しているし、10万円以上もする定期を買うお金はなかった。私は昔から習い事もさせてもらっていた。

学校や習い事の集金は、集金日に遅れてもきちんと払っていたし、必要なものは買ってもらえた。特に貧困であると感じたことはなかったが、部活の費用や定期代などある程度お金がいるときは苦しいだろうなと思い、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。しかし、そうではなかった。実際には、生活もぎりぎりで借金だってあったのだ。それを知ったのは、母が亡くなってからのことだった。母は親族とも疎遠であったため頼ることはできなかった。まさに、四つの貧困に陥っていたのである。私は、この自らの体験から、日本の母子家庭のワーキングプアの深刻さが身に染みてわかる。

日本のシングルマザーへの手当は決して少ないわけではない。児童扶養手当や医療費の免除などがある。しかしこれだけでは、児童扶養手当は支払いに回されるだろう。私の家もまとまったお金が入ってくる児童扶養手当をあてにし、支払いをしていた。この小論文を書くにあたって初めてシングルマザーについて深くまで調べた。その結果、日本とひとくくりには出てこない各県や市・町からのシングルマザーに対する制度を見つけた。例えば、島根県浜田市は県外から移住する人向けに最大約400万円の助成がある^{注)}。それには条件があるが、その条件こそ、シングルマザーのワーキングプア解消になる。その条件とは、市内の介護事業所で就労研修を受けることだ。これは非常に画期的な制度である。ただし、これにも問題点がある。一番の問題は、子どもが転校しなければならない点だ。勉強する環境や人間関係が変化すれば子どもに精神的ストレスを与えてしまうかもしれないのだ。それを解消するためには、まず、引っ越し時期を考える。例えば、幼稚園から小学校、小学校から中学校に上がる時期は、友達と学校が離れてしまう場合も多い。人間関係が変化するこの時期だからこそ、子どもへの負担も少ないのではないだろうか。

「真似」というと悪いように聞こえるが、良いことはどんどん取り入れるべきである。もし、「真似」をされたという自治体が出てきたら、それはシングルマザーを助けたいと思い、掲げている政策ではない。私ならば、それはただ過疎化を止め、人口を増やしたいだけだと受け取る。たくさんの県や市・町にこの制度があればどれだけの人やシングルマザーが助けられるだろう。家賃を払えない母子の無理心中や、貧困からくる児童虐待など最悪の状況に陥る前に助けたい。今はまだ少ないけれど、国だけが助けではない、と多くのシングルマザー

に伝えたい。

現代の人々は見ただけでは貧困だとわからない。それは、シングルマザーの子どもにもわからない場合もある。だからこそ危険なのだ。もし、私の住んでいる地域にこの制度があったのなら、私の母はもう少し楽に私のことを育てられただろう。そして、母の笑顔ももう少しこの世に存在したのかもしれない。

(注) 浜田市地域政策部政策企画課「平成 28 年度 浜田市 定住支援パンフレット」

URL <http://www.city.hamada.shimane.jp/www/contents/1402040165889/simple/H28pannhu.pdf>

<参考資料>

樋田敦子『女性と子どもの貧困—社会から孤立した人たちを追った』大和書房、2015年12月

